



〒892-0841 鹿兒島市照国町13-42 カトリック鹿兒島司教区 電話099 (226) 5100 振込口座 02030-2-8359 編集発行 教区広報部 1部60円年間千共1100円



司教の手紙

世界病者の日に寄せて

鹿兒島教区司教 中野裕明

皆さまお元気でしょうか？今回は2月11日「ルルドの聖母」の記念日に指定されている「世界病者の日」についてお話ししたいと思います。

この日は聖パウロ・ヨハネ二世教皇によって制定されたもので、今年で29回目になります。その趣旨は次のようなものです。

「病者がふさわしい援助を受けられるように、また苦しんでいる人が、自らの苦しみの意味を受けていくための必要な助けを得られるように、カトリック医療関係者に対してだけでなく、広く一般社会に訴えていかなければなりません。

医療使徒職の設立、ボランティア活動の支援、医療関係者の倫理的霊的養成、病者や苦しんでいる人への宗教的な助けなども重要な課題です。」(「カトリック教会情報ハンドブック2021」67頁参照)

ご承知のように、ルルドと病者とは深いつながりがあります。村の少女・ベルナデッタに現れた聖母が彼女に指示した所から湧き出した泉の水によって傷病者が癒されるという奇跡が起きた場所です。この事実が教会によって認証されるには

時間がかかりましたが、現在のように医療技術が進んでいない当時は、奇跡を信じる宗教か、それとも合理性を優先する科学かで、激しい論争がまき起こりました。1860年代のことです。現代では宗教と科学の対立は克服されたように思いますが、しかし、病人を「診る」あるいは「看る」という温かい医療ではなく、高度な医療器具を使って病気を診るだけ人は診ない、と言われても仕方ない状況があるように思えます。病気がなくなったら、患者(患うもの)とされ、疎外感を味わうのではないのでしょうか。

ルルドに巡礼に行かれたことがある人はお分かりでしょうが、そこは、病人さんと介添えの方が同数ある

訃報

藤田壽夫修道士

ラ・サール修道会鹿兒島修道院の藤田壽夫修道士が1月14日(木) 帰天した。94歳だった。岡山県真備町出身のブラ



岡山県真備町出身のブラ

年間600万人と言われる巡礼者は、単に病気の治癒祈願のためだけに行くのではありませぬ。神様の憐みに触れるために行くのです。

私が個人的に出会ったご婦人は、そのとき3回目だと仰っていました。1回目は、ガンで、余命半年といわれたとき、2回目はルルドから帰ってから診察したガンが進行していないと

ザー藤田は、1964年に初誓願、その後1970年に終生誓願を宣立し、鹿兒島だけでなく仙台ラ・サールホーム事務長、ラ・サール会日本地区会計担当として修道会及び修道会が経営母体となる施設のために働いた。

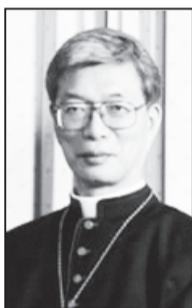
岡田武夫名譽大司教

12月18日(金)、前東京教区大司教の岡田武夫名譽大司教が頸部食道がんのため入院先の都内の病院で帰天した。79歳だった。岡田名譽大司教は、1941年千葉県市原市に生まれ、司祭に叙階されたのは1973年11月3日。1991年に浦和司教に叙階され、2000年9月から東京教区大司教となった。引退は2017年だったが、在任中には日本カトリック司教協議会会長を務めるなど活躍した。

その岡田大司教の葬儀は12月23日(水) 関係者のみで行われ、追悼ミサは



1月19日(火) 東京カテドラルでささげられた。



1月19日(火) 東京カテドラルでささげられた。

浜口末男大司教

大分教区の浜口末男司教が12月28日(月)、悪性黒色腫のため由布市内の病院で帰天した。72歳だった。浜口司教は長崎市西出津町生まれで、1975年3月19日、司祭に叙階された。大分司教に叙階されたのは2011年6月のことで、9年半大分教区を導いてきた。その葬儀ミサと告別式は12月30日(水) 大分教会でささげられた。



溝辺教会(マリア山荘) 溝辺教会広報担当の西勝さんから、次のようにクリスマスミサ(12月24日)の報告があった。「8人の信者さんが参加

短信

マリア教会で堅信式

1月10日(日) マリア教会で堅信式が行われた。受堅者は中学生8人で、内訳はマリア教会(4

小教区通信員便り

溝辺教会(マリア山荘) 溝辺教会広報担当の西勝さんから、次のようにクリスマスミサ(12月24日)の報告があった。「8人の信者さんが参加

奉献生活の恵みへの感謝と新しい召命を願う

奉献生活者のためのミサ

日時: 2月6日(土) 14時 場所: ザビエル教会 司式: 中野裕明司教 主催: 鹿兒島教区修道女連盟 ※コロナ禍のためミサだけの予定です。心を合わせてお祈りください。

お悔やみの掲載 教区報では、帰天された方々を悼み、その永遠の安息を祈るため「お悔やみ欄」を設けます。ご希望の方は故人のお名前、年齢、小教区名を主任司祭か広報担当を通じてお知らせください。 鹿兒島教区広報部

差別主義と平等主義 (10)

紫原教会主任司祭

山口好信

ロシアの文豪トルストイは若い頃放蕩生活の時期もあり、また兵士として戦争に従軍したこともありましたが、47歳の頃、先回紹介した『ディダケー』(十二使徒の教訓)の写本が発見されたこと(1875年)もあって『光あるうち光の中を歩め』を執筆します。そして、その中に『ディダケー』の冒頭部分を用います。「二つの道がある。一つは生命の道であり、今一つは死の道である。この二つの道には大きな違いが相違がある。さて、生命の道は次の通りである。すなわち第一に、あなたを創った神を愛しなさい。第二に、あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい。自分の身に起こらないようにと願うことはすべて何でも、他の人に対して行なうてはならない。…」かなり長い引用をトルストイはしていますが、結局、人はどう生きればよいのか：神への愛と、人を自分のように愛する隣人愛との実践をい

くどうなるか：その生活は互いに与え合う共同生活になつていくのではなからうかとトルストイは言っているように思われます。この小説は、100年頃の迫害時代、つまり『ディダケー』の背景となつている時代を舞台にしています。宝石商の子であるユリウスと、奴隷の子パンフィリウスという二人は、15歳の時から同じ哲学者の下で勉強した大の仲よしの青年でしたが、その後、ユリウスは家督を継ぎ、結婚し、商売に力を注ぐという普通の生活をし、パンフィリウスはキリスト者でもあつたので、キリスト者

の共同体の中で生活するようになり、この共同体にはキリスト長老やその奥さんがいて、皆の先頭に立つておられ、ほかの連中はその後からついて行っている。「そして先頭の連中はもうキリストの掟に接近しています。つまり自己否定にですね。自己の霊を獲得するために、これを滅ぼしたつていうわけです。こういう人たちには、もう何物もいりません。こういう人は身を惜しまず、キリストの掟に従つて、最後の一物まで全部求める者に与えます。が、これよりもやや信仰の弱い連中もあります。こういう連中は全部提供するつていうことはできません。フラフラと決心が弱くなつて、まだまだ自分で自分が惜しくなつてくるんです。この人たちは着なれた衣服や食べなれた食物がないとげつそりとなつてしまふんです。が、さらに一段弱い人間があります。つい最近この道に帰依したばかりの人たちがそれです。…」ユリウスは様々な体験をする中でしばしば考え苦悶し、仲よしだったパンフィリウスのようにキリスト者の共同体に入ろうかと悩みます。...

それは共同体になつていきまふ。信仰共同体です。ですから③だけでなく集会も生活もそれら全体が「相互の交わり(コイノニア)」です。ヨハネが「あなた方も私たちとの交わりを持つようになるためです。私たちの交わりは、御父と御子イエス・キリストとの交わりです」(第一の手紙1・3)と言つたところの「交わり」です。パウロが信者を「兄弟」と呼んだのもそのためです。聖餐つまりエウカリスチアはこのような交わりの中でこそ本物であり得るのだと思います。今のミサは、そのような交わりの中で、なされていくのでしょうか。

ユリウスに向かつてパンフィリウスは「われわれの間には何物をも自分の私有と考へる人間がないんです。信仰に従つて、つまりわれわれがキリストの教えに従つた生活にのみ、この世の悪と死

からの救いの存することを信ずるといふ意味なんです。」パンフィリウスはマタイ21・33〜42のたとえ話を語りだします。葡萄園の主である神様に、われわれ人間は年貢を納めなければならぬ。お借りした葡萄園も自分の命も、自分の物としないで神に仕えるために、神意を遂行することに用いていく、そんな生活をキリスト者共同体ではしているのだ、と弁明します。先回、愛餐が消え「聖餐・エウカリスチア」だけが突出して発展していったことは述べました。パンフィリウスたちが求めたのは「キリストの教えに従つた生活」であり、それが「相互の交わり、信仰共同体」になつたのでした。パンと葡萄酒が聖別されてキリストの血肉に変化し、それを食することによって生きていくとしたのではありませぬ。のちの教会は徐々に「キリストの教え」の中からイエスの最後の晩餐の言葉「これは私の体である。これを私の記念として行なえ」だけを取り出して、ミサという儀式に突出させていったと言わざるを得ません。これはキリストの意向

に沿うものなのかどうかです。先回に引き続き、どう展開していったかを見てみましょう。2世紀末のエイレナイオス(今のフランスのリヨン(の司教)によると、「神は焼き尽くすいけにえを望まざり、神の言葉に聞き従うことを望む」という趣旨のことを口に酸っぱくなるほど言つたのち、「主は：そこで被造物で出来たパンを取り、感謝して仰せになつた。『これは私の体である。』また、人間と同じく被造物の一つである杯を取り、自分の血と言明され、新しい契約の新しい奉獻であると教えられた。これを教会は使徒から授かり、全世界で神にささげられているのである。』旧約のマラキ書1・11「日の出る所から日の入る所まで、諸国の間でわが名はあがめられ、清い捧げ物が捧げられる」というのは、イエス・キリストによって成就した。今、教会がキリストを通して神に「清い犠牲、捧げもの」を奉獻しているのだと(「異端駁論」第4巻第17章)。つまり、聖餐(ミサ)自体が捧げもの(奉獻、いけ

にえ)であると言つたのです。ミサはこうして実生活から遊離したものになつていきまふ。次に、ローマのヒッポリュトス(2世紀末〜3世紀初頭)は『使徒伝承』の中で聖餐について述べています。ミサの奉獻文に当たる部分では、神が御子イエス・キリストを遣わされたことなどを述べてから苦難へと引き渡された時、主はパンを取り、感謝をささげて「取つて食べなさい。これはあなた方のために裂かれる私の体である。」同じように杯も取つて「これはあなた方のために流される私の血である。これを行なう時、私の記念として行なさい。」ですから私たちがその死と復活を記念し、御前に立つて祭司として仕えるにふさわしい者として下されたあなたに感謝し、このパンを捧げます、と続きます。これは最後の晩餐を想起せよ、記念せよという言葉です。この言葉は、イエスの意向によつて、イエスが定めたという意味で(「制定句」と学者たちによつて呼ばれています。さらに「聖なる教会の捧げもの

の言葉「愛の行いひとつ、ひとつが祈りです」が私の心の羅針盤であり、小さな支えになつております。

上には、あなたの霊を送つてくださいます。また「すべての人をひとつに集め、聖霊に満たしてください」と、聖霊に呼びかける祈りがあります。のちのミサの「奉獻文」の大切な要素をすべて備えているという意味で、最初の完全な奉獻文であると言われます。ミサの中心部分はほぼ完成したということですが、典史の本にそう書いてあるのを読むと、なるほどと納得して、それ以上、何も言えなくなりそうです。しかし、イエス・キリストの意向は、弟子たちが「制定句」を儀式的に実行することにあつたのでしょうか。

に「聖なる教会の捧げもの」

牧師の回心かん④

マザーテレサの言葉に導かれて

相談員 文城 さなえ

目を閉じて、深く一呼吸し、心を空っぽにして受話器の前に座ります。「はい、きぼうの電話でございます。どうぞ、よろしくお聞かせください。」

このの、小さい鳴き声の、小さい鳴き声の、全身を耳に傾けて寄り添います。人と人が繋がって

いるこの時間を大切にしながら、そのお方を声で感じ、少しでも心の重荷が軽くなるようにと、願いながら傾聴しています。

ザビエルの「案内係」をしていたある日、こんなことがありました。6月頃の小雨の中、若い母子連れが教会の前でじつと立って、呆然としているような姿が見えました。赤ちゃんをおんぶして男の子の手を引いています。すると突然、男の子がお母さんの手を引く張つて教会の方へ歩いてきました。私はすぐに駆け寄って「どうぞ、入つて。雨に濡れます」と声を

かけました。すると男の子が少し安心して、嬉しそうに声で「お母さん、入つてよかったですね。ね、言つたでしょ」とお母さんの顔を覗き込んで言いました。

私は「本当、来てよかったね。絵本もありますよ。雨が止むまでゆつくりしていつてね。神様もきっと喜んでいらつしやると思いますよ」と声をかけました。

しばらくの間、沈黙の間が続きました。それから少し経って、県外から嫁いでいらしたと重い口調で一言話されました。帰り際に「教会に来てよかった。心がホッとしました」と話され

シノドス典礼部会研修

典礼一般 (主に冠婚葬祭)

日時：2月23日 (火) 14時～
講師：藤山義和氏 (パウロ社)
場所：教区本部

教会と社会をつなぐ耳
鹿兒島きぼうの電話
TEL099-223-3399
月曜日～金曜日
(9時～16時/20～23時)

70周年に大きな贈り物

善意によって壁画と内外装を整備

指宿教会

指宿教会は、昨年70周年を迎えることができました。感謝の気持ちを込めて記念式典を開催したいところでしたが、現在コロナ禍にあり、開催することはできませんでした。

指宿教会は、70年の長い経過の中で幾度となく梅雨時期の風雨や台風の影響に遭い、その都度、信者一人ひとりの善意に支えられて、どうにか修理費を捻出してやってきました。しかし、月



①聖堂内の壁画の前で喜びの信者たち
②外壁、屋根の修理が終わった教会

日が経つごとに雨漏り、屋根、外壁、聖堂内壁の変色、剥がれがあった天井などに修理が必要になり、信者の方々に一度に修理費を担っていた方には無理があつたので、毎月修理費を献金する形を取ることに決め、数年が経ちました。このように準備はしてきたものの、最近の風雨の被害はひどく、早急な修理が必要な状態になっていました。

もうない連絡をいただきました。高額な修理費と壁画修復費用を故直美智子さんの妹さんである直美江さんと、壁画制作者の純心聖母会の佐藤ひろ子シスターのご友人である東京在住の窪田美保子さんから、ご寄付の申し出をいただいたのです。

壁画修復には、日本画家の西村さんのご協力の申し出もいただきました。その申し出を有り難く受けさせていただくことになりました。神のほからいはいは、私たちの知る由のないところで準備されていたことを思わせられました。おかげ様で、外壁、聖堂内壁の変色、剥がれかかった天井や壁が綺麗に修理され、壁画も描かれた時のように修復されました。5人の方々から心からの感謝とお礼を申し上げると共にご健康をお祈りさせて

いただきます。また、この修理を請け負ってくださった業者の皆様もよい方々で、誠心誠意働いてくださいました。業者の方々にも、感謝いたします。指宿教会70周年のすばらしい神様からのお恵みをいただいた私たちは、日本26聖人殉教者の強い信仰心を受け継いで行く決心と努力を忘れずに、これからも歩いていきたいと思っております。

【指宿教会広報担当 福沢智子】

+KABAYAN SEKSYON+ Tunay na Edukasyon sa Loob ng Pamilya

“Tungo sa mas Mahusay na Edukasyon ng mga Bata” ang pamagat ng ika-7 kabanata ng Ang Kagalakan ng Pag-ibig na isinulat ni Papa Francisco. Ayon sa Santo Papa, “Sa mabuti man o masama laging may impluwensiya ang mga magulang sa moral na pagsulong ng mga bata.” Kaya naman nararapat lang na “gampanan (ng mga magulang) ang tungkulin nilang ito nang buong-pagiisip, masigasig, makatwiran, at naangkop” (259), na gumagamit ng mga tradisyunal at mga makabagong pamamaraan sa paggabay sa kanilang mga anak, kasama na ang “paghubog sa pananampalataya” (287-290).

Kapupulutan din ng aral ang isang bahagi kung saan sinasabi ng Papa na “hindi edukasyon ang obsesyon. Hindi natin maitatakda ang bawat sitwasyon na maaring maranasan ng isang bata...Kung obsesyon ng mga magulang na laging alamin kung nasaan ang kanilang mga anak at pinipigilan ang lahat ng kanilang paggalaw, maaring masakop nga nila ang kapaligiran pero hindi ang kanilang mga anak” (261).

“Ngunit hindi ito ang tamang pagtuturo, pagpapalakas, at paghahanda sa kanilang mga anak sa pagharap sa mga hamon ng buhay. Ang pinakamahalaga ay ang kakayahan nilang matulungan ang mga anak na lumago sa kalayaan, maturidad, disiplinang pangkabuuan, at tunay na pagtayo sa sariling paa” (261).

Hinihiling ni Papa Francisco sa mga magulang na malugod nilang tanggapin kung nasaan ang kanilang mga anak sa landas ng maturidad.

Ang magiging huwaran ng mga magulang kung paano matuturuan ang mga anak sa tamang landas ay ang banal na pamilya ng Nazaret, sina Jose, Maria at Jesus. Ibinigay nina Jose at Maria kay Jesus ang tamang pagtaguyod sa kanya sunod sa plano ng Ama.

Taon ng Parokya bilang Komunidad (Fr. Dino Orolfo)

前回に続いて「地獄」という言葉を考えましょう。旧約聖書には日本語と同じく死者が住む場所を意味する「シユエオール」という言葉が見られます。これは神様の目から見て邪な人間が集まる場所であり、追放の場所、神様との関係が断たれた場所、そして犯した罪の罰としての場所といった意味合いをもちます。もしイエス様が死んだ後の世界のことを言いたかったのであれば、この「シユエオール」の訳語と考えられる「ハデス(陰府)」を使つたはず

です。しかし、ゲヘナという地名が使われていることに留意されなければなりません。神様を信じる者にとっての真の惨状とは神様から恩恵を受けることができないうことにあります。それは神様と断絶してしまつた不幸な状態です。神様が私たちから離れることありません。しかし、人間は自由意志

《康由神父の聖書教室(34)》

地獄についての考察(2)



場は存在しません。存在するとして矛盾です。なぜなら、神様が創られたものはすべて善きものだからです。また、神様はすべての人の救いを望まれているので

の濫用によって神様の愛を拒むことができます。つまり、私たちが神様から離れていくのです。そもそも聖書にはこの世での報いとして罰を受ける

す。以上のことを踏まえ聖書に於ける「地獄」を考える際には神の国との関連で考えなければなりません。この地上を生きる間、人間は必ずしも全面的に神様と結ばれている訳ではありません。神様から受けた恩恵を失うこともあります。ここに地獄の余地があると言えるでしょう。

地獄とは神の国の本質から考えられるべきものです。神の国の本質とは神様と人間とが直接結びつき、神様から離れる可能性がないということです(「イコリント15・28参照」)。これは神様の創造の御業・目的が成就することを意味しています。原則的にすべての人々、更には被造物全体が神の国を構成しています。実に地獄とは神様と永遠に結ばれることがないことにその本質があります。つまり、地獄とは神様から完全に切り離された状態のことを指していると言えるのです。往々にして日本人がイメージするような死後の世界のことではないことに注意が必要です。

会と催し 2月

- 2日(火) 主の奉獻
- 3日(水) 中野アカデミー・教区本部・19時
- 4日(木) ボッファイ神父命日(1988年)
- 5日(金) 日本26聖人殉教者
- 6日(土) 奉獻生活者のためのミサ・ザビエル教会・14時
- 7日(日) 年間第5主日
- 10日(水) 中野アカデミー・教区本部・19時
- 11日(木) 小島芳武終身助祭叙階記念(2019年)
- 13日(土) 世界病者の日
- 14日(日) ハンマ神父霊名(ヨルダン) 年間第6主日
- 17日(水) 出口市太郎神父命日(1958年)
- 17日(水) 川淵明神父命日(2002年)
- 17日(水) 灰の水曜日(大斎・小斎)
- 20日(土) 四旬節愛の献金(四旬節中)
- 20日(土) 正義と平和協議会・教区本部・13時
- 21日(日) 四旬節第1主日
- 22日(月) レジオマリエ鹿児島コミチウム・谷山教会・14時
- 22日(月) 聖ペトロの使徒座
- 23日(火) シノドス典礼部会研修・教区本部・14時
- 24日(水) 中野アカデミー・教区本部・19時
- 25日(木) 鈴木康由神父叙階記念(2013年)
- 25日(木) 教区の日(ミサ)・ザビエル教会・19時
- 27日(土) 大隅学園理事会・教区本部・10時
- 27日(土) 東條一浩神父命日(2001年)
- 28日(日) 青年会・鴨池教会・18時30分・鴨池教会
- 28日(日) 四旬節第2主日
- 28日(日) オリブの会及び共にこの道・教区本部・14時

祈りの意向

- 【祈祷の使徒会】 女性への暴力
- 世界共通 子どもや女性の保護
- 日本の教会

青年たちに新しい風

鴨池教会で定期的にミサと勉強会

青少年司牧担当のピアンネ李秉徳神父によると、これまで教区本部で開いていた青年会を鴨池教会で行っているとのこと。内容は18時30分からミサをささげ、その後、青年たちが避けては通れない恋愛や結婚についての教会の教えを学んでいるらしい。この勉強会の内容はすこぶる好評で青年池教会の霧島彬神父。勉強会の内容はすこぶる好評で青年たちの数も徐々に増えているらしく、ピアンネ神父は「新しい風が吹き始めた」と喜んでおられる。ぜひ多くの青年たちが集い、学習する場にして欲しい。この鴨池教会での青年会は原則的に毎月第4土曜日、18時30分から。

教区シノドス これからどう進む⑤ 全員参加の共同体を目指して

教区シノドス推進会事務局 長 野 宏 樹

4・自覚する教会

これまで三つのタイプの小教区像をながめてきました。今回は第二バチカン公会議直後にさまざまなところで目立つようになった「自覚する教会」と呼ぶこともできる、前向きに生きようと努力する教会の姿について考えてみたいと思います。

1. 私たちが「教会」の一員

左の絵と前回の絵との相違点はどこなところでしょうか。小教区評議会以外の場でも、小教区評議会と同じテーマについて話し合っているようです。

第二バチカン公会議以前の教会で「教会とは何ですか?」という質問をされると、ほとんどの方が「ミサが捧げられる建物(聖堂)」、あるいは「教皇様や司教様・神父様たちによって成り立っている、信者を天国へ導いてくれる神の代理者たちのグループ」などと答えていた



ました。しかし公会議以後は、「教会は私たち信者全員で作っているのだ」「私たちが自身が教会なのだ」という意識を信者たちも持ち始めるようになりまし

とはいつても、「私たち自身が教会だ」とはどういうことか? 「教会の存在理由は何か?」などという問いに対して納得できるような解答を、そう容易には見出すことはできませんでした。そこで世界中の教会のあちらこちらで、「教会とは何か?」という問いを真剣に問い始めたのです。

しかし、鹿兒島教区におけるその面での動きは、非常にゆるやかなものでした。今になって考えると、そのお蔭かも知れませんが、信者たちはそれほど違和感もなく教会全体の動きを少しずつ受け入れていったように思えます。そして1970年に糸永司教様が着任されてからは、司教様の強いリーダーシップのもと、次から次へと具体策が提示され私たちは戸惑いや

本当にこれだけでよいのだろうかと感じながらも、全員参加型の教会づくりの動きが、着実に軌道に乗ってきたようです。

2. 全員参加型の教会

では、全員参加型の教会とはどんなものでしょうか。

それは、司教や司祭が教え・指示し信者は有無を言わずに従う、それが気に入らなければ反発するか陰口を言う、というタイプの教会でないことは明らかです。全信者が自分たち一人ひとりが動かなければキリストが望まれる教会の動きはストップするのだという意識を持ち、各自に与えられた役割を喜んで引き受け

て、全体が希望と活気に満ち溢れている教会のことです。

しかし、それはあくまでも理想論であって、現実の教会はまだまだそこからはほど遠い状況にあります。でも公会議以前の教会と比べてみると、年を重ねるごとに一歩ずつそこへ近づきつつあるのだという実感はわいてきます。

3. なぜ?なぜ?なぜ?

全員参加型の教会になるまでには、さまざまな疑問や困難な問題に直面し、それらを一つずつ解決していかなければなりません。

なぜこれまでどおりの教会生活ではいけないのだろうか? なぜ信者は教会の仕事をしてくれないのだろうか? なぜ神父様は信徒の意見に耳を傾けてくれないのだろうか? なぜ教会には男女の差別があるのだろうか? などなど、さまざま

な疑問への回答ないし解決策を見出す努力をしなければなりません。

また、若者が教会へ近づくようになるにはどうすればよいのだろうか、「信仰と生活の一致」をめざすためには何をどう改善すればよいのだろうか、信徒が社会的活動に関心を持つようになるにはどうすればよいのだろうか? などなど、さまざまな問題と真剣に対峙しながら、一歩ずつ改善していく必要があります。

4. 改革に対するさまざまな反応

何らかの変更を行おうとする際には、賛成意見と反対意見とが必ず出てくるものです。

公会議後の教会における信者間の意見の衝突も、実に激しいものでした。ミサ中のことばがラテン語から日本語へと変わり、それを捧げる祭壇が背面向きから

対面向きへと変わる際などは、あたかも天変地異が起きたときのような騒動でした。

あれから65年以上過ぎた現在では、もう対面式ミサに違和感を持つ人などまったくいなくなつたのではないのでしょうか。10年くらい前に洗礼を受けた方々にそのような話をすると、なんだか何世紀も前の教会の歴史を聞いているような感じがする、ということばが返ってくるほどです。

しかし、何らかの改革が行われようとしている現場に生きている人々にとつては、事は重大です。ほとんどの人が、現状を維持することないし維持しながら少しずつ変更していく道を選びたがりません。教会内の改革の場合は、信徒であれば、自分たちはこれまででまされ続けてきたのかという不信感を抱く人も出てくるかもしれないと、聖職者であれば、これまでの自分たち

の指導が間違っていたのではないかと不安を抱き、自信をなくしてしまう可能性もあるでしょう。

そこで大切になるのが、「見極め」です。この改革を進めていけば教会ははたして改善されるのかどうかについての見極めを、できれば当事者全員で行うことです。そして、もし肯定的な結論が出されたならば、一致協力しながら、その実現に向けて一歩ずつ進んでいくことです。教区シノドスで多種多様な意見が出され、その内容は提言書に示されていますがまさに「教会とは何か?」そのためにはこうして欲しい」という切実な希望が出され具体的な「見極め」の作業がシノドス推進会議で継続中です。

次回は、第五のタイプの教会像として、「小共同体中心の教会」について考えていきたいと思ひます。

KJP (鹿兒島正義と平和協議会) 通信 2月号

キリスト教的防災の心

コロナ禍中お見舞い申し上げます。

新型コロナウイルス感染症の広がりは、社会に対する影響と被害の大きさから見て「大規模災害」ということができます。実際アメリカやドイツの防災法では、疫病などの感染症は「自然災害」としてこれに対応するよう定められています。しかし日本では、疫病などの感染症は「災害」とみなさず、防災法の対象外となっています。それで政府は、新型コロナウイルス対策特措法の改正で乗り切ろうとしているわけですが、巨人に

小人が立ち向かうようだとて心もとないです。

新型コロナウイルス感染症がパンデミックに広がり、現在その死者数が世界で200万人を超えるという事態は、一国の防衛力を超えた非常事態であり、歴史的大災害の襲来と見るのが普通だと思ふのですが、日本政府はこれを認めず、防疫体制の充実強化によって対処できるとしています。医療への過度の期待は、医療従事者たちを追い詰めるだけです。彼らの負担を軽減する手立てを講じることが先決だと思ひます。聖書によれば、戦争・飢

饑・地震・疫病などによつてもたらされる大きな苦しみや不安は、十字架の死を通して肉の命から永遠の命へと過ぎ越すための産みの苦しみの始まりとされています(マタ24・6-8、ルカ21・10-11)。

「マタイはいいいます。」「私のあとに従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を担つて、私に従いなさい。自分の命を救おうと望む者はそれを失い、私のために命を失うものはそれを得る。全世界を手に入れたとしても、自分の命を失つたならば、なんの益にならうか。(16・24-26)」これは「防災への招きのことば」であるともいえます。「命を守るために災害に備える」ことが防災です。これを上の聖書のことばに照ら

して考えると、守るべき命は、肉の命ではなく、内にあ

るキリストの命であるといわれます。もしわたしたちがキリストの命に生きていながら、災害はわたしたちに対してなんの力もありません。わたしたちは災害から自由です。だから、一人でも多くの弱い人たちの命をまもるために、恐れることなく災害に立ち向かい、その振る舞いを把握し、対応の仕方を考え、それを隣人たちと共有し、小教区の災害文化とする。こうして互いの絆を強めて苦難を乗り越え、キリストの再臨を待ち望む。キリスト教的防災とはそういうものだろうと思ひます。

年、風水害も激甚化しています。そこで聞ききたいのですが、防災訓練を定期的に行っている教会がありますか? あるとすれば、その教会ではどんな災害を想定して行っているのでしょうか? またそれは、その教会で災害リスクの最も高いものですか?

そこで提案ですが、共同体の絆を深めるために防災訓練をされてはいかががでしょうか。(正平協会員・防災士 上坪憲治)

▼社会問題の分かち合い (毎月第三土曜日)
日時: 2月20日(土)
13時~16時
場所: 教区本部
内容: 原発・改憲・沖縄問題についての情報交換その他